

微生物学教室の沿革

昭和2年（1927年）、本学の前身である大阪高等医学専門学校を設置準備室が置かれたのは、創設者筆頭の吉津度先生が所長を務めた大阪細菌研究所でした。健康保険法が全面実施され、国民の健康への関心が高まるなか、日本梅毒学会や衛生・微生物・寄生虫学会連合が設立など感染症関係の学術強化体制が整えられた年でもあります。里見三男教授の主宰する細菌学教室は、創立当初から設置されたのもそのような背景があったためと思われま

す。吉津先生は、感染症治療薬やワクチン製造のために必要な細菌を効率よく増殖させるために吉津式大試験管を開発するなど細菌学の研究にも寄与されました。戦中戦後の混乱を乗り越えて、旧制大阪医科大学を経て新制大阪医科大学へ移行する際にも、細菌学教室は維持され、第2代教授に山中太木博士が就任されました。当時、教室では細菌学中心の研究を行っていましたが、アレルギー研究や電子顕微鏡の導入によるウイルス学研究へとその範囲を広げました。第3代教授にはウイルス超微形態学を専門とする中井益代博士が就任し、研究の中心はウイルス学となり、麻疹ウイルスのヌクレオカプシドの構造の決定・ヒト白血病ウイルス（HTLV-1）の超微形態の決定・ヒト免疫不全ウイルス（HIV）の細胞内侵入過程の可視化などの成果を上げてきました。第4代にレトロウイルス学を専門とする佐野浩一博士が就任し、エイズウイルス（HIV）の研究にはじまり、病原微生物学から感染症学へのリエゾンが図られ、超高感度逆転写酵素活性測定法の開発・腸管病原性細菌の疫学・食塩水電気分解産物を用いた消毒法の確立・廃棄薬剤による環境負荷を低減する方法の確立・病原細菌の病原性発現に係わる菌体内ナノトランスポートの発見解析などの研究が幅広く進められています。

かつて、医学進学課程2年+医学部4年であった医学教育カリキュラムが、平成13年（2001年）には6年一貫とされ、旧進学課程の教員と基礎医学の教員が緩やかに連携する教員組織となり、平成14年（2002年）には医学進学課程さわらぎキャンパスが本部キャンパスに統合されました。同年、大学院設置基準の第14条特例に基づき、大学院の授業を夜間にシフトしたことに伴い、土曜日に「ラボセミナー」を開講して授業と演習を設定し、大学院生や研究生の教育体制を整えました。

平成15年（2003年）には、第2学年から第4学年の医学教育にPBL (Problem-based learning) を導入し、当教室の担当授業科目は「微生物」と「免疫学」から「病原体・生体防御2」と「病原体・生体防御3」へと変更し、免疫学に相当する「病原体・生体防御1」を生理学教室が担当することになりました。また、平成16年度（2004年度）からは

医学教育6年一貫化を受けて、基礎教室が初期医学教育を担当するモデルとして、「医学概論」を当教室で担当することになり、市内の生命誌研究館の中村桂子館長の協力を得て、「生命誌」を包含する本学の独創性を示す「医学概論」を開講し現在にいたっています。

また、平成16年（2004年）には、3年をかけて準備された研究体制の整備が完了し、共同研究組織を形成できる研究機構が形成されました。この機構は、業績次第で、独立した研究所、大学院附属の研究センター、場合によっては学部の研究室など時宜に応じて様体を変更できる組織でした。当教室では研究機構に共同研究プロジェクトを複数立ち上げ、大学院生の教育に資する研究の強化を図りました。

平成19年（2007年）には、医学部の講座再編が行われ、当教室は「予防・社会医学講座」に属することとなり、教室の正式英語名を「**Microbiology and Infection control**」とし、他の教室に先立って大学院の形態系専攻微生物学の教育内容を大幅に変更しました。平成18年（2006年）から19年（2007年）には日本細菌学会関西支部が当教室に置かれました。平成21年（2009年）には、大学院再編により、医学研究科の専攻は「医学専攻」に一本化され、当教室は予防・社会医学コース「微生物学・感染制御学」を担当することとなりました。